

＜巻頭レビュー＞
アテンションの季節を生きるアイドルたち
—現代アイドル研究の意義と展望—
Idols Living in the "Saison" of "Attention":
Idol Research Life Starter Pack

木下翔太郎^{*†‡}

Shotaro Kinoshita

I. 特集の企画意図と巻頭レビューの位置付け

本誌『地球・宇宙・未来』は創刊から3年目を迎えた。前号に引き続き、今号でも2025年11月18日・19日に東京・お台場の日本科学未来館で開催された『GUNDAM OPEN INNOVATION 2021-2025 ～GOI PROJECT REPORT～』の講演録を一部掲載する。また、今号では本誌初の取り組みとして、「アイドル」について特集する。

日本のアイドル文化は、アニメや漫画などと並び、日本のポピュラーカルチャーの代表的な存在として国内外で認知されている¹⁾。そうした中で、人文学・社会科学においても、アイドルは極めて興味深い研究対象となっている。従来の研究は、マスメディア主導の巨大資本が生産する「文化商品」としての側面や、表象文化論・記号論に基づく分析が主流であった。しかし、デジタルプラットフォームとSNSの浸透はアイドルを取り巻く環境を激変させ、社会との関わり方そのものを変容させている²⁾。

とりわけメディアの分散化は、ご当地アイドルや地下アイドル、さらにはセルフプロデュースアイドルといった多様な存在を次々と生み出した。だが、こうしたアイドルの裾野の広がり、過酷な競争環境や契約、権利保障など新たな課題も浮き彫りにした。

他方で、ファンの側においても変化は著しい。アイドルが現代のポップカルチャーにおいて確固たる存在感を高めるにつれて、彼ら・彼女らを情動的に支援し、消費を通じて自己投影を図るファンの振る舞いは「推し活」という言葉で広く一般化し、それ自体が社会現象として新たな分析対象となっている。

このような背景のもとで企画された本特集の目的は、現代アイドル文化の重層的な諸相を描き出し、今後のアイドル研究に向けた見取り図を提示することにある。とりわけ、本特集ではアイドルやアイドルファンが紡ぐ「ナラティブ」を幅広く提示している点に大きな特徴がある。研究者による分析のみならず、当事者たちの生きた語りを収集・記録することは、令和という時代におけるアイドル文化の「現在地」を鮮明に浮き彫りにする試みであり、後続の研究にとっても貴重な参照点となるはずである。

* 東京大学大学院学際情報学府

† 東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構

‡ 慶應義塾大学医学部医科学研究連携推進センター

特集の導入として、本巻頭レビューでは、広がり続けるアイドル文化の展開の一端を紹介しつつ、本特集に収録された各寄稿がアイドル研究のなかでどのように位置づけられ、いかなるキーワードによって解釈されうるのかを整理したい。本レビューが、本特集を読み解くための導入であると同時に、今後のアイドル研究の展望を考えるための一助となれば幸いである。

Ⅱ. 「歌って踊る」アイドル：日本的受容の系譜と特異性

アイドルという言葉や概念がいかんして誕生し、メディアや社会のなかで定着してきたかという史的展開については、本特集に収録された田島論考³⁾および境論考⁴⁾においても詳細に論じられているため、まずはそれらをご参照いただきたい。ここで改めて確認しておくべきは、現代において、アイドルという存在の定義が極めて困難であるという事実である。

かつて批評家中森明夫が、アイドルとは「好き」になってもらう仕事、と簡潔に定義したように⁵⁾、アイドルという存在は、ファンの感情や関心を引き受ける「感情労働」[§]的な営みによって支えられている面が大きい。それゆえにアイドルという言葉は、グラビアタレントや、声優にいたるまで広範に適用され、その輪郭は拡散し続けている。こうした多義性を前提としたうえで、本特集が主に分析の対象とするのは、いわゆる「歌って踊るアイドル」である**。

この歌って踊るアイドルを一つのエンターテインメントのジャンルとして捉え直したとき、現代のシーンは大きな構造転換の渦中にある。近年の日本のアイドル市場を牽引しているのは、テレビメディアや配信プラットフォームを巻き込んだ「オーディション番組型アイドル」の隆盛である。視聴者がデビュー前の選考プロセスから直接的に介入し、育成に関与するこのシステムは、現代のアテンション・エコノミーと見事に合致し、爆発的な消費を生み出している。本特集の塚田論考は、こうしたオーディション番組の歴史的展開を日本社会の変容と対照させて論じている⁶⁾。1970年代の『スター誕生!』による「未熟さ」を前提としたアイドル像の創出や、1990年代の『ASAYAN』に代表される選考過程のリアリティショー化を振り返りつつ、近年における「敗者や個人の内面に寄り添う形式」⁷⁾への変化を整理する。選考システムの変貌を通じて、そこに映し出される現代社会の意識や構造の変化を解き明かす試みである。

一方で、現在の日本のアイドル文化を語るうえで避けて通れないのが、グローバル市場を席卷するK-POP文化の台頭と、その影響である。高度なダンススキルと歌唱力、徹底した合理主義的トレーニングによって世界標準のポップスを提示するK-POPのシステムは、日本のアイドルシーンにも多大な地殻変動をもたらし、パフォーマンスの基準やプロダクションの戦略を塗り替えつつある。本特集の山本論考は、こうしたK-POP現象を単なる楽曲の魅力や一時的な流行ではなく、制度・メディア・ファンダムが連動する「動的な構造」として捉える⁷⁾。デビュー段階から越境を前提とした多層的なコンテンツ設計や、SNSやプラットフォーム環境と連動した

§ 社会学者・ホックシールド (A. R. Hochschild) が提唱した概念。自身の感情を管理・コントロールし、顧客の精神状態や感情に働きかけることが求められる労働形態を指す。

** 本特集では、女性のアイドルを対象とした研究や、女性アイドル当事者の著者が大半となっているが、男性アイドルの当事者や研究者にも寄稿の依頼を試みていたが叶わなかった結果であることをここに付言しておく。

ファンの分散的な協働（翻訳や拡散などの再生産）に着目し、国内市場依存型の傾向が強かった日本の音楽産業との構造的な対比を試みている。K-POPを「文化の生成・流通・消費の仕組みそのものを書き換えた現象」として位置づける論考である。

しかし、そうした K-POP と比較されることで、それとは全く異なる進化を遂げてきた日本独自のアイドル文化の特徴が浮き彫りになったとも言える。その最大の特徴は、パフォーマンスの完成度そのものよりも、むしろ「未成熟さ」や「成長のプロセス」に価値を見出す点にある。

そもそも、現代のアイドルに限らず、歌舞伎や落語、相撲といった日本の伝統芸能において、若手の「未熟さ」やその育成過程を観客が共に見守り享受する文化が存在してきたことは、多くの先行研究で指摘されている⁸⁾。とりわけ戦後のアイドルやポピュラー音楽の受容に関して、周東は、近代化の規範であり「成熟」を価値基準とするアメリカ的規範に対し、日本ではあえて「未熟さ」を魅力として受容し、独自の文化形態へと発展させてきた構造を論じている⁹⁾。

こうした「未熟さ」の受容構造を踏まえつつ、本特集の辻論考は、1980年代以降のアイドルファン文化において「成長物語」そのものを鑑賞・愛でるあり方が定着していたことを踏まえたうえで、現代のファン心理には新たな変容が見られると指摘する¹⁰⁾。すなわち、今日の「推し活」においては、単に未成熟な状態のまま成長過程を楽しみ続けるにとどまらず、ファンの応援や購買行動によって「努力が報われ、やがて成功へ至る」という達成を目指す傾向が存在する。辻はこうしたファンの情動と参画のあり方を「立身出世趣味」という概念を用いて表現し、日本型アイドル文化の現代的リアリティを描き出している。なお、こうした受容構造は、現代ではアイドル自身やアイドルをプロデュースする側にも意識されており、「高嶺の花」ではなく「一生懸命さ」をみせることやファンに身近な存在であることが重視されるようになっている¹¹⁾。

こうした「立身出世」のプロセスを具体的につくり出し、受け手に見出してもらう方法も多様になっている。香月は、世間に根強い「受動的もしくは非実力的」というアイドルに対するステレオタイプな社会的イメージに対し、個々のアイドルがいかに関自らの主体性や努力でそれを乗り越えていくかという過程こそが、今日におけるアイドルの魅力の形成の核になると指摘している¹²⁾。なお、現代における「アイドルらしさ」というステレオタイプの背景にある、社会やファンがアイドルに対して無意識に投射・期待する規範（コード）の構造については、上岡（2023）の著書『アイドル・コード：託されるイメージを問う』などに詳しい¹³⁾。

以上のようなマクロな構造的展開を踏まえ、次章では視点をミクロな当事者主体の実践へと移し、アイドル関係者およびファン側の言説を通して、現場における具体的経験と認識の諸相を検討する。

Ⅲ. メディアの「島宇宙化」と多様なナラティブ

1. アイドル当事者の経験と葛藤

かつてマスメディアが主導していた時代において、アイドルとして認識されるためには大手芸能事務所に所属し、テレビ番組などの狭き門を通過することが不可欠であった。しかし 2000年代以降、AKB48 に代表される「会いに行けるアイドル」の登場やライブハウスを中心とする

接触型ビジネスモデルの定着など、マスメディアを介さずとも活動を成立させられる環境が少しずつ形成されていった。これらの変化に加え、2010年代以降のSNSや動画プラットフォームの普及が重なったことで、ファンそれぞれのタイムラインは個別に分断され、誰もが独自の島宇宙^{††}を所有するようになる。こうしたプラットフォームを通じた直接的な集客やファンコミュニティの維持が可能になったことは、マスメディアの選別を経ない多様なアイドルの出現を可能なものとした。

その結果として、シーン全体におけるアイドルの絶対数は爆発的に増加することとなる。この拡大を象徴するひとつが、2010年より開始された国内最大級のアイドルフェス「TOKYO IDOL FESTIVAL (TIF)」の推移である。初開催となった2010年に出演したアイドルグループ数は50組程度であったのに対し¹⁴⁾、2025年には214組、計1,561名ものアイドルが出演している¹⁵⁾。

こうした構造変化がもたらした本質的結実の一つが、当事者自身の属性や背景の多様化と、それに伴うアイドル像の広がりである。前述のような「未成熟さ」や「成長物語」といった従来のアイドル文化の基盤を引き継ぎつつも、現代では多様なルーツや生き方、等身大の悩みを持つ存在がそのままアイドルとして受け入れられるなど、その魅力や役割はより多角的になっている。

例えば、本特集に掲載された、かんだちちよかのエッセイは、まさにこうした当事者の多様化の一例と言える¹⁶⁾。同稿では、日系アメリカ人として異文化の狭間で感じてきた自身の葛藤を起点に、日本のアイドル文化が持つ多様性の広がりや肯定的に捉えている。そして、自らのアイドル活動を通して、社会のどこにも完全には馴染めない人々にとっての「心理的居場所」や「自己の肯定装置」を築こうとする当事者像を提示する。ここからは、単にパフォーマンスを披露する存在としてだけでなく、自身の背景や感覚を共有しながらファンとの繋がりを結んでいく、現代的なアイドルの姿が示されている。

同じく現代アイドル文化の多様性を体現する存在として、北村舞香は「医師」という専門的キャリアと「アイドル」としての表現欲求を両立させ、従来アイドルに向けられてきた固定観念を打破しようとしている¹⁷⁾。しかし彼女の眼差しは多様化の肯定にとどまらず、地下アイドルシーンの過酷な現実にも向けられる。運営体制の不透明さや労働環境の脆さ、権利や身を守る仕組みの不十分さといった苦悩の共有は、当事者だからこそ語り得る貴重なナラティブと言える。

さらに、多様化した環境の中で当事者が表現活動を維持していく過程では、内面的な葛藤や過酷な心理的コントロールが伴う。モモコグミカンパニーは、社会学者・ゴフマン (E. Goffman) の「役割演技」の理論を参照しながら、アイドル活動の中で日常的に「見せる自分」を選択・制御しているプロセスを明かしている¹⁸⁾。そこでは、ファンの期待に応じて心の交流を成立させるための高度な感情労働が求められると同時に、表象された「人間味」と本来の自己との乖離に苦悩する当事者の切実な生の声が捉えられている。

こうした当事者の精神的負荷を加速させているのが、現代の過熱するメディア環境である。夏

^{††} 社会学者・宮台真司らが提唱した概念。社会全体で共有される普遍的な価値観や物語が失われた結果として生じた、人々が趣味や関心ごとに細分化・孤立化した小さなコミュニティ群のこと。各「島宇宙」の内部では独自の価値やコミュニケーションが完結している一方、相互の交流や共通言語は持ちにくくなっている状態を指す。

目志穂は、SNS や配信プラットフォームを介したファンとの距離の近さが生む熱狂と、境界線の不鮮明化や心理的負担という双刃の剣を提示する¹⁹⁾。また、アテンションエコノミー下で「バズ」をめぐる評価軸に翻弄され、画面上の拡散価値とライブ表現との乖離に苛まれる当事者のジレンマが、率直に吐露されている。

2. アイドル文化を支える表現者とファンの語り

アイドル文化の現在地を多角的に把握するためには、演者のみならず、楽曲を提供する制作者や、それを享受・支えるファンの視座を接続することが不可欠である。

シンガーソングライターであり数多くのアイドルへ楽曲を提供する作詞家・作曲家でもある山崎あおいのエッセイは、アイドルソングの作詞における表現のあり方に重要な視座をもたらす²⁰⁾。18 歳でデビューした自身の経験を振り返る山崎は、多感で危うい心を持つ若いアイドル達に向き合い、「どんな言葉で書けば彼女たちを傷つけずに済むか」という葛藤を深めている。アイドルの人生を一方的に物語化する「代弁」を排し、歌い手自身の尊厳や心を守るような「伴走」としての言葉を模索するその姿勢は、演者に寄り添う誠実な制作倫理のひとつの具体像を提示している。

続いてファンの側から論じる森貴史のエッセイは、森のこれまでの著作と重ね合わせて読み解くことで、オートエスノグラフィーとしての深みを増す。森は過去に刊行した 2 冊の書籍において、研究者でありながら一ファンとしてアイドルに深く没入し、やがて「最初の推しが卒業する」という試練に向き合うまでのプロセスを、生の感情とともに赤裸々に記録している^{21,22)}。本エッセイでは、推しが卒業した後のソロ活動の追跡や、推しを失った後のグループをなおも応援し続ける自身の姿など、さらなる「その後の実践」が克明に描かれている²³⁾。書籍での「卒業までの記録」を踏まえて本論考を読むことで、推しの卒業後も続いていくファン心理のリアルな変遷が浮かび上がり、オートエスノグラフィーとしての魅力が一層引き立つ構成となっている。

これに対して、自身もお笑い芸人として舞台に立ちつつ、長年アイドルライブに通い続ける寺田寛明のエッセイは、現場を知り尽くした「オタク」の観点から鮮烈な問題提起を行っている²⁴⁾。特定のグループのみを推すのではなく、シーン全体を俯瞰してきた立場から、1 秒以内のわかりやすさやバズが至上命題となる中で、フォーマットや表現の画一化が進み、個性的で質の高いライブ表現が正当に評価されにくくなっている構造的な課題を指摘している。現場の熱狂や生々しい情動を肯定しながらも、過度な商業的効率化に対する批評的な視線を投じるその姿は、現代のアイドルファンが単なる消費者にとどまらず、シーンの多様性と未来を鋭く見つめる主体であることを示している。

IV. アイドルの「その後」を生きる：セカンドキャリアの模索と構造的課題

現代のアイドルシーンにおいて、セカンドキャリアの問題が大きな議論として浮上してきた背景には、アイドルという職業を取り巻く構造的な変化と社会情勢の変容がある。現代においては、アイドルという職業そのものの活動期間の長期化やメンバーの年齢層の上昇に加え、社会全体の共働化や生涯労働の定着により多くのアイドルが卒業後も自らの「セカンドキャリア」を

現実的に模索せざるを得ない状況に置かれている。その一方で、空前のアイドルブームを経て市場に過多数のアイドルが存在する現在、卒業後も芸能活動を続けられる者はほんのごく一握りに過ぎない。こうした問題意識から、かつては自己責任として片付けられがちであった「卒業後の生き方」に対し、卒業後のキャリア支援といった構造的な環境整備の必要性が問われるようになっていく。こうした課題は単なる「一部の卒業生の悩み」ととどまらず、活動中のアイドル全体を覆う構造的な不安として存在している。フェミニズムマガジン『エトセトラ VOL.8』に掲載された「アイドルの未来のためのアンケート」²⁵⁾において、当事者であるアイドル自身が「活動中にどんな悩みがあるか／あったか」（複数回答可）という設問に対し、最も多く挙げた回答が「将来について」であったという事実は非常に象徴的である²⁵⁾。

こうしたセカンドキャリアの構築を根本で支え、また阻害もしうる重大な要因として浮上するのが、活動中における「学びの機会」の保障である。この問題については、本誌過去号における和田彩花のエッセイでも具体的に指摘されている²⁶⁾。和田は、自身がアイドル活動の過密日程の中で大学院まで進学し美術史研究に励んだ実体験を踏まえつつ、アイドルシーンが抱える教育機会の制限について、「アイドル活動は教育の代わりにはならないし、本来受けるべき義務教育すらもおろそかなりかねない」という業界の現実を指摘する。

本特集では、この卒業後のキャリア問題について、当事者視点から取り組んでいる元アイドル達にも焦点をあてた。元アイドルのセカンドキャリア支援会社「ツギステ」を立ち上げた橋本ゆきは、アイドル時代に培った対人能力や度胸は外の世界でも通用する強力な武器になると指摘し、業界や社会全体で「卒業してもその先がある」というセーフティネットを創り出すことの意義を主張している²⁷⁾。

一方、グループ活動を経て現在はキャリアコンサルタントとして活躍する十束おとはは、アイドル活動を通じて培われる「セルフプロデュース力」や「情報発信力」などは他業界でも高度に通用するビジネススキルであると評価しつつも、当事者自身がそれを適切に「言語化」・「棚卸し」できる相談窓口や機会が圧倒的に不足している現状を指摘する²⁸⁾。そして、辞める際に初めて進路を考えるのではなく、変化に応じて主体的に自身の可能性や強みを捉え直す「プロティアン・キャリア（複線の・変幻自在なキャリア設計）」の考え方を導入することこそが、本人の人生設計とアイドル業界の持続的な発展の双方にとって不可欠であると論じている。

こうしたキャリア支援の仕組みづくりが求められる一方で、アイドル活動と並行あるいはその後において、大学や大学院といった高等教育の場へ進み、自らの「好き」や興味関心を学術的に追求することを通して、独自のキャリアを切り拓いている実践者たちもいる。

本特集にエッセイを寄せた宮田愛萌は、オープンキャンパスでの出会いをきっかけに『万葉集』の魅力に惹かれ、大学の文学部で学びを深めた²⁹⁾。大学での学びや本好きの背景を生かし、現在は執筆や発信活動を通して文学の魅力を伝えるなど、自身の関心を卒業後のキャリアへとつな

²⁵⁾ 2022年7月から8月にかけて実施され、「現役または元アイドル」、「アイドルと一緒に仕事をする人々」、「アイドルファン」の3属性の回答者から計1408件の回答が集まったアンケート。特に実態の把握が困難な当事者層の声を集めた貴重な資料となっている。

げている。

同じく本特集で寄稿している岡田彩夢は、アイドル活動を行いながら大学院博士課程に在籍する当事者として、学業とアイドル活動を巡る環境の変化を肌で感じつつ、大学院における「学び」の本質を言語化している³⁰⁾。彼女は、既存の知識を得る「勉強」と自ら問いを立てる「研究」の違いを示したうえで、大学院で養われる論理的思考や知的な深まりが、表現者としての多角的な視点や他者と差別化された「武器」となり、活動の幅を広げる独自のキャリア形成に寄与していることを提示している。

また、自分の「好き」を深め、ソロ活動の大きな強みとして確立した先行事例として、本誌の過去の掲載号に論考を寄せた寺嶋由芙の取り組みも挙げられる^{31,32)}。寺嶋は大学の卒業論文でもテーマにした「ゆるキャラ」への探究を軸に、グループ卒業後もソロアイドルとして「ゆるキャラ好き」を自身の明確な武器へと昇華させてきた。

V. アイドルファンと社会・経済を結ぶ新たな接点

ここまで、アイドル個人の語るナラティブや、現代的な課題であるセカンドキャリアの形成といった「アイドル自身」に光を当てた実践や議論を辿ってきた。しかし、アイドル文化を巡る現代的な変化は、表現者側のあり方にとどまるものではない。目を転じれば、彼女たちを支え消費するファン側の心理や行動、さらにはそれを取り巻く社会・経済・ビジネスシステムもまた、大きな変容を遂げている。本特集に寄稿された各論考からは、こうした「ファン」と「社会」の側で起きている多角的な地殻変動が鮮明に浮かび上がる。

まず、地域経済や観光の文脈において「ファンツーリズム」を分析するのが柴田論考である³³⁾。柴田論考は、2次元と3次元が融合した「デジタル声優アイドル (22/7)」という対象に着目することで、従来の「会いに行く」アイドル遠征や「世界観を迫体験する」アニメ聖地巡礼とは異なる複層的な移動行動を示し、アイドル研究の多様化に寄与している。

また、組織行動論の枠組みを用いてファン心理のメカニズムに迫るのが上田論考である³⁴⁾。上田論考は、ファンが推しに対して抱く「心理的所有感」や「アイデンティフィケーション」が、情報発信などの自発的・貢献的な推し活を駆動させる構造を示している。こうした貢献的行動を通じてファン自身の「推し活幸福感」が高まるという分析結果は、推し活がファンのウェルビーイングに寄与するプロセスを論理的に説明している。

このファン心理の変容や受容のあり方について、ジェンダーやファン文化の多様性という観点から掘り下げるのが小埜論考と望月論考である。

小埜論考は、男性アイドルを応援する男性ファンというマイノリティの存在に着目し、同性アイドルを推す行為が、規範的な「男らしさ」から解放された自身の「非男性性」の承認プロセスとして機能する構造を明かす³⁵⁾。また、女性優位の趣味領域への越境に伴う「肩身の狭さ」を分析するとともに、SNSやオーディション番組によりファンの「利己性」が高まっている点も考察している。

一方、望月論考は「女性ファンの増加」に着目し、指原莉乃プロデュースの=LOVEや木村ミ

サブプロデュースの FRUITS ZIPPER などの事例を挙げながら、供給側の戦略的転換と共感構造を解説する³⁶⁾。そのうえで、消費者行動論における「拡張された自己」^{§§}の概念を援用し、女性ファンにとってアイドル消費とは単なる憧れや恋愛感情ではなく、アイドルのパフォーマンス体験を通じて自らの感情や人生の可能性を再発見・拡張する試みであると提示している。

最後に、メディアの現場での観察とデータ分析をもとに「推し活が個人の主観的ウェルビーイングに与える好影響」を提示するのが吉田論考である³⁷⁾。吉田論考は「ももいろクローバーZ」のファン（モノノフ）を対象とした実態調査から、彼らの主観的ウェルビーイングや未来への展望が日本平均を明確に上回っていることを示す。心理学の「自己決定理論」^{***}を枠組みとして用い、義務感や搾取構造を回避した自律的な推し活が、現代社会において個人の生活の満足度や幸福感を高める要素として機能していると結論付けている。

VI. 当事者の人権と持続可能な産業構造—労働・法的環境・テクノロジーの視座

前章で見たように、ファンの心理的充足や「推し活」の普及、地域・経済への広がりによってアイドル文化の社会的存在感が高まる一方で、その産業構造や法的基盤の未熟さに由来する課題も表面化している。エンターテインメントとしての熱量が高まるからこそ、それを支える法的環境やビジネスモデルの健全化、そして何より表現者自身の権利擁護が不可欠となる。本特集の締めくくりとして、契約・労務・権利・技術の面から持続可能なアイドル文化のあり方を論じるのが深井論考と境論考である。

弁護士の立場から実務的な問題解決の視点を提供するのが深井論考である³⁸⁾。深井論考は、事務所とアイドルの間で生じる報酬不払い、解約制限、過大な違約金請求といった典型的なトラブルを整理し、その背景にある当事者間の「交渉力格差」と「法的知識の欠如」を指摘する。そのうえで、実質的な「労働者性」を認める裁判例の動向を示し、契約の透明化やコンプライアンス体制の整備、さらにはアイドル自身の法的リテラシー向上の重要性を主張する。なお、こうした法制度面からのアプローチは当事者でも理解が難しい側面もあるが、深井は元地下アイドルでライターの姫乃たまとの共著『地下アイドルの法律相談』³⁹⁾の刊行や、ソロアイドルの寺嶋由芙とパーソナリティを務める Podcast 番組『アイドルと法律』などを通じ、当事者の目線に立った精力的な啓発活動に取り組んでいる。

さらに、こうした労働・法的環境の問題は、アイドル自身の生き方やメンタルヘルス、ジェンダー規範といったテーマとも深く結びついている。本特集の論考ではないものの、当事者による発信の一例として、和田彩花によるエッセイ集『アイドルになってよかったと言いたい』を挙げることができる⁴⁰⁾。同書では、自身の長期にわたるアイドル活動の経験から、構造的な労働問題や「求められる女性像／アイドル像」との相克、メンタルヘルスの葛藤、そして自らの権利と自由を獲得するための模索が当事者の視点から切実に綴られている。法制度や契約の不備がもた

§§ 心理学者・ベルク（Russell Belk）が提唱した概念。人はモノや体験の所有・享受を通して自己を定義し、拡張するという消費者行動論の理論。

*** 心理学者・デシ（Edward L. Deci）とライアン（Richard M. Ryan）が提唱した概念。人の持続的な幸福感や動機付けには「自律性」「有能感」「関係性」の3欲求の充足が重要であるとする。

らす影響は単なる経済的トラブルにとどまらず、表現者自身の心身や人権に直結する課題であることを、こうした当事者発信の試みは強烈に物語っている。

こうした当事者の語りや現場の取り組みを受けつつ、コンテンツ産業論の視座から産業制度や法的課題を包括的に整理するのが境論考である⁴⁾。境論考は、1970年代から続くアイドル像の変遷や契約環境の変革を辿りつつ、近年深刻化する生成AIの台頭に対する法的防衛線として肖像権や不正競争防止法の活用可能性を論じる。

VII. おわりに

本特集を通じてあらためて確認できたのは、日本のアイドル文化が単なる一時的なエンターテインメントや消費現象にとどまらず、社会学、法学、経済学、心理学など多様な領域を横断して探究されるべき重要な学術的研究対象であるという点である。

アイドル当事者もファンも、そして産業を支えるあらゆる人々も共通して願っているのは、アイドル個々人の心身の健康が守られ、その活動や文化自体が健全に未来へ受け継がれていくという持続可能性に他ならない。アイドルを学術的に研究する意義もまた、まさにここにある。当事者が直面する苦悩や、その背景にある構造的・制度的な課題を学術の立場から厳密に浮き彫りにし、環境改善に向けた実践的な知見を提供すること。さらには、アイドル文化が持つ独自の文化的価値や日本の特徴を、表面的なクールジャパン文脈へ無批判に回収させたり、セルフ・オリエンタリズムⁱⁱⁱ⁾の道具として消費させたりするのではなく、その本質や構造的な問題を批評的に捉え直し、健全な発展と発信に寄与すること——これこそが本領域の研究に課された役割なのではないだろうか。

また、こうした研究実践を通じて、現場で交錯する当事者の切実な声や問題意識を記録し、時代を超えて検証可能な知として蓄積していくことも極めて重要である。過酷な労働環境や人権問題が忘却されたり透明化されたりすることなく、歴史の記録として残り改善へとつなげていく基盤は、こうしたアーカイブの積み重ねによってこそ形作られるからである。

以上のような課題に 대응していくためには、研究コミュニティのさらなる発展が不可欠である。しかしながら、近年の学術政策においては、人文社会科学系学部のダウンサイジングや、短期的かつ経済的な実用性ばかりを重視する評価の傾斜が強まりつつある。アイドル研究に代表されるような、ポップカルチャーや現代社会の表層・深層を鋭く捉える新興の学術テーマや学術的取り組みは、まさにこうした政策的揺り戻しの影響を真っ先に受けかねない脆さを孕んでいる。

時代とともに変容し、現代社会の多様な諸相や課題が凝縮されたアイドル文化への学術的アプローチが、一時の流行として潰えたり、学術基盤の縮小によって途絶えたりすることがあってはならない。目先の利益や即効性にとらわれず、現代社会の人間や文化の営みを批評的に洞察し、

ⁱⁱⁱ⁾ サイド (Edward W. Said) が提唱した「オリエンタリズム」に派生する概念。オリエンタリズムとは、西洋が東洋を「異質で後進的」、「神秘的・エキゾチックなもの」などとして一方的に解釈・固定化し、自らの支配や優位性を正当化してきた非対称な視座を指す。セルフ・オリエンタリズムとは、非西洋の側がその「外部からの好奇やオリエンタリズム的視線」を自ら内面化し、相手の求めるエキゾチックなイメージを自ら進んで演じ、商品化・消費させる態度や構造を指す。

構造的な問題を深く捉え直す知の枠組みこそが、結果として最も長期的かつ根本的に社会や個人の尊厳を守る基盤となるからである。当事者の権利と人権を守り、文化のエコシステムを持続可能にしていくための知の営みが絶えぬよう、本特集が研究コミュニティの持続的発展を支える足がかりとなれば幸いである。

文献

1. Otmazgin, N. K. (2013). *Regionalizing culture: The political economy of Japanese popular culture in Asia*. University of Hawaii Press.
2. 鈴木祐啓. (2026). 「動画」 メディアが変えたアイドルファンダムカルチャー. 地球・宇宙・未来, 2(2), 43-46.
3. 田島悠来. (2026). アイドル文化研究に携わって社会を見つめること. 地球・宇宙・未来, 3(1), 115-118.
4. 境真良. (2026). 「アイドル」産業のエコシステムの構造分析. 地球・宇宙・未来, 3(1), 93-98.
5. 中森明夫. (2017). *アイドルになりたい!*. 筑摩書房.
6. 塚田修一. (2026). アイドル・オーディション越しに見る社会. 地球・宇宙・未来, 3(1), 119-122.
7. 山本浄邦. (2026). K-POP という現象は何を変えたのか—熱狂・ファンダム・グローバル文化の現在—. 地球・宇宙・未来, 3(1), 107-110.
8. Oksana, K. (2018). 日本社会における「未熟さ」の商品化: ジャニーズタレントのファン行動を読み解く. 生活社会科学研究/お茶の水女子大学生生活社会科学研究会 編, (25), 51-63.
9. 周東美材. (2022). 「未熟さ」の系譜—宝塚からジャニーズまで—(新潮選書). 新潮社.
10. 辻泉. (2026). 立身出世“趣味”としてのアイドル. 地球・宇宙・未来, 3(1), 127-130.
11. 天野健作, & 田村菜月. (2025). アイドル学のススメ: 「FRUITS ZIPPER」, 「= LOVE」に見る現代社会の“鏡”. 地球・宇宙・未来, 2(1), 61-72.
12. 香月孝史. (2014). 「アイドル」の読み方 混乱する「語り」を問う. 青弓社.
13. 上岡磨奈. (2023). アイドル・コード: 託されるイメージを問う. 青土社.
14. 音楽ナタリー. 国内最大のアイドルフェス「TIF」はどのようにして生まれたのか(前編). 2023. <https://natalie.mu/music/column/521506>
15. 音楽ナタリー. 「TIF」でアイドル 214 組熱演! スペシャルなステージが連続、真夏のお台場が沸いた 3 日間. 2025. <https://natalie.mu/music/news/635094>
16. かんだちちよか. (2026). どこにも完全には属せない私が、アイドルになる理由. 地球・宇宙・未来, 3(1), 49-52.
17. 北村舞香. (2026). 医者とアイドル、二つの夢の先に. 地球・宇宙・未来, 3(1), 53-64.
18. モモコグミカンパニー. (2026). 私が“アイドル”を辞めなかった理由. 地球・宇宙・未来, 3(1), 15-16.
19. 夏目志穂. (2026). 島宇宙化とバズ社会がもたらすアイドルの多層化とジレンマ—「見つけ

- てもらう」手段と「見届けてもらう」目的の狭間で―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 43-48.
20. 山崎あおい. (2026). アイドルソングにおける「伴走」の言葉を求めて. 地球・宇宙・未来, 3(1), 33-36.
 21. 森貴史. (2026). 稲場愛香さんを推しつづけるということ. 地球・宇宙・未来, 3(1), 65-68.
 22. 森貴史. (2020). 「現場」のアイドル文化論: 大学教授, ハロプロアイドルに逢いにゆく. 関西大学出版部.
 23. 森貴史. (2023). 推しが卒業するとき: 大学教授, ハロプロアイドルを「他界」する. 図書出版みぎわ.
 24. 寺田寛明. (2026). 変容するアイドルシーンの10年―現場文化の視点から―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 37-42.
 25. 鈴木みのり, 和田彩花. (2022). アイドルの未来のためのアンケート. エトセトラ: フェミマガジン, 8, 58-73.
 26. 和田彩花. (2025). アイドル活動と勉強, 研究. 地球・宇宙・未来, 2(1), 39-42.
 27. 橋本ゆき. (2026). アイドルの「その先」に、誰が責任を持つのか. 地球・宇宙・未来, 3(1), 25-28.
 28. 十束おとは. (2026). アイドル業界におけるキャリア形成をめぐる課題―キャリアコンサルタントの観点から―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 23-24.
 29. 宮田愛萌. (2026). 『万葉集』の学びと人文学への誘い. 地球・宇宙・未来, 3(1), 17-18.
 30. 岡田彩夢. (2026). 大学院というものについて、博士課程に在籍するアイドルより. 地球・宇宙・未来, 3(1), 19-22.
 31. 寺嶋由芙. (2025). ゆるキャラの今 新型コロナウイルス影響後のゆるキャラ事情. 地球・宇宙・未来, 1(2), 9-21.
 32. 寺嶋由芙. (2025). ゆるキャラの今 新型コロナウイルス影響後のゆるキャラ事情 (後編). 地球・宇宙・未来, 2(1), 43-58.
 33. 柴田仁夫. (2026). デジタル声優アイドルとファンツーリズム. 地球・宇宙・未来, 3(1), 111-114.
 34. 上田泰. (2026). 推し活の研究の面白さ: 組織行動論からの接近. 地球・宇宙・未来, 3(1), 123-126.
 35. 小埜功貴. (2026). 男性アイドルを推す男性ファンのまなざし―マイノリティのファンに与る抑圧と承認―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 99-106.
 36. 望月優夢. (2026). 女性がアイドルを推すとき―「拡張された自己」としての女性アイドル消費論―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 69-72.
 37. 吉田尚記. (2026). 推し活とウェルビーイングの可能性―「ももいろクローバーZ」ファン調査から見てきたもの―. 地球・宇宙・未来, 3(1), 29-32.
 38. 深井剛志. (2026). アイドルをめぐる法的紛争と解決の視点. 地球・宇宙・未来, 3(1), 87-92.
 39. 深井剛志, 姫乃たま. (2020). 地下アイドルの法律相談. 日本加除出版.

40. 和田彩花. (2026). アイドルになってよかったと言いたい. 太田出版.